

建築家狩野忠正 —建築に込めた魂—

福原成雄

はじめに

本学環境デザイン学科元学科長、教授狩野忠正先生は、2001年に本学に着任され、2011年定年退職されるまで、10年間、建築家ではなく環境建築家であると言われ我々を指導していただきました。

大学内の活動だけではなく、学外でも積極的に活動され大学の発展に尽力されました。

制作と理論では、先生の学生との接し方、大学で活動されたお仕事、環境建築家としてのお仕事、退官後の様々な活動を通して、建築に込められた魂を見つめてみたいと思う。

展覧会「反転の構図」では、情報化社会の中で話題性ばかりを追い求め、その背景となる見えない部分の大切さを忘れているとして、見える物を隠し、見えないところに光をあてられた。



写真-1 展覧会「反転の構図」

1. 狩野先生との出会い

2001年環境デザイン学科4代目学科長として来られた時に

お会いした。

最初は、様々なワークショップを企画され実行された。

最初にお会いした時に先生は、元竹中工務店の設計部長で、自ら建築家ではなく環境家ですと言われていました。

狩野先生の印象

- 1) スケッチブック
- 2) 学生に対する熱い視線。
- 3) 優しさと厳しさ独特の語り口、まとめ役、進行役、建築に情熱を傾ける。

2. 大学での活動

2005年5月16日から29日まで開催された「アーツアンドエコロジー展 2005」ではディレクター、コーディネーターとして海外作家の作品、本学の多くの教員が参加しアーツとエコロジーというテーマで発表する本学初めての作品発表展を企画されました。



写真-2 アーツアンドエコロジー展2005



写真-3 アーツアンドエコロジー展2005



写真-4 天満天神繁昌亭

3. 狩野先生との思い出

1番の思い出は「日本庭園を世界で作る」を出版するに当たり、京都の学芸出版を紹介していただき、前書きをお願いしたら、気軽にイギリスキューガーデン、ウイズリーガーデンからフランスロスチャイルド美術館まで出かけられ、執筆していただきました。そのご姿勢を見習わせていただいています。

先生には、助教授から教授に推薦をしていただき、大学院スタッフにも加えていただきました。そして、ゼミでは造園分野と建築分野の隔てをなくされ、一緒にゼミ学生を担当させていただきました。

ある日見た夢で先生の家に住む。和風で、布団が敷き並べられていて、たくさんの方が集まっている。何があるのか尋ねると、クッキーをみんなで作るのと、庭に出ると、とても広く、螺鈿で細工された能舞台が在り、イエローサブマリンの様な船が芝生の中に置かれ、さすがに先生はロマンチックだなんて、話し合っている。

母屋を見ると山の中に埋まっているかの様な状態である。

先生から以前お宅に呼ばれたのですが、実現出来ていません。家も学生時代にご自身で設計され、ミースファンデルロエのガラス建築の様だとお聞きしたことがあります。夢は、まったく違っていました。

しかし、不思議な夢でした。



写真-5 三輪そうめん山本本社

神戸大学百年記念館

六甲道から歩いて20分程の海拔100mの見晴しのよい丘のうに「神大会館」「留学生センター」からなる軽快で美しい姿の記念館が建っています。

学術交流の進展と教育研究の歴史、資料を紹介すること、外国人留学生の支援、交流の推進を目的に神戸大学創立90周年記念事業として神戸から世界に向かって羽ばたく白鳥の姿をイメージし、先生が建築に込めた魂を設計されています。



写真-6 神戸大100年記念館

4. 建築に込めた魂「建築ノート」

「世界の丸い家を歩く」から

1987年1月から36回、近畿建築士会協議会月刊誌「ひろば」に掲載された海外の建築家と作品を現地で考え紹介され、その事を「建築ノート」として出版されました。

その内容から先生の建築に対する思いが伝わってきます。

1) 時代が建築を創らせる

「このように20世紀の建築の動向を見ていると、建築家が建築を創ったというよりも、時代が建築を創らせているのだという構図が浮かび上がってくる。

複雑なる社会的要求条件を解きほぐす行為を繰り返す建築は、まさにその時代精神を映し出すものと考えられる。」

天満天神繁昌亭の誕生、コンセプト、設計、最小限の工事費用、寄付集めのために作られた提灯等仕事の流れを見ているとこの言葉の意味を強く理解出来ます。

2) 風土から自然に生まれた建築

「建築はそれが成立する場所との関わりを強くもっている。地域には場所の力を強くもつところ弱いところが現れるようだ。

建築の成立と場所のコンテキストを語られることがよくある。歴史性との関連性において、建築が場所に接地する限りその関係は存在する。

建築の創造とは多様な条件の重層によるのだ。

現地の素材、伝統的な形態が空間構成において関わっている。時を忘れさせる建築があるとすればこのような建築をいうのであろうか。」

この考えは、私の作庭思想とも同じである庭はその土地の風景との関わり、素材によって生まれ歴史に刻まれ時を超えて存在します。

3) 彫刻的な建築の成立

「彫刻的なもの、鉄とコンクリートによる近代建築の証は、造形性にあって新しい可能性を示した。建築の彫刻的表現が追求されてきた。

都市の中の建築の考え方はまた、都市の中のシンボルとなる建築として語られるようになった。

結果、シンボル性をより高める彫刻的建築を生み出すことになった。建築が様式の時代から遊離し、抽象化された空間により形作られるものとなったとき、彫刻的な規範で考えるようになったのである。」

先生は日本の都市で多くの彫刻的建築を創られたが、クラフトマンシップを忘れず生き生きとした建築を追求されています。

4) 「世界の丸い家を歩く」

先生は丸い家に見せられて中国、モンゴル、イタリア、トルコ、アフリカ、スペイン、アメリカ、韓国、ニューカレドニアの国々を歩かれ、自身の設計に取入れられています。

「丸い家には夢があるのだ。このことは建築を設計する上で助けとなる。設計には夢がなければ止まるのだ。不自由があり、無駄が救いだ。……独立性があり、美しいのだ。このことが風景にとけこんでいるのだ。

長い歴史を持つことは、生命力がある建築と云えるのだ。建築には歴史があって生活が続けられるのである。……」

風景と一体となって美しい丸い家の魅力を述べられています。そして、地域の歴史伝統文化と解け合い、いまだに生活に使われている建築の生命力から夢を見つけれられています。

5. 狩野先生の活動

土曜会を主催、毎回スペシャリストを招き勉強会を積極的に行なわれています。

NPO 法人これからのまち・建築・みどりをつくる会主催。
親子でお絵かき造形教室主催。



写真-7 土曜会

先生の学生に対する態度は、一切の妥協を許さない大変厳しいものでした。しかし、一步授業を離れて接する眼差しは優しい。

必ずゼミ学生の実作活動の現地を見に行かれました。



写真-8 大学院環境・建築 狩野・福原ゼミ

岡山のハンセン病施設をテーマにしたゼミ学生と愛生園に行き、現地調査、面接をし、夏祭りの踊りにも参加して、身を

持って指導される姿に感動させられました。



写真-9 長島愛生園

博士課程の京都府宮津市現地調査では、二度も足を運ばれ、現地のまちづくりのメンバーと意見交換会をし、自ら積極的に参加するその姿をゼミ学生に見せられました。

仙台から岩手とゼミ学生の現地調査では、岩手のまちづくりグループとも話し合われました。



写真-10 岩手散策

先生が手がけられた建築作品もご案内していただき、説明していただきました。

ゼミ旅行箱根

紫陽花の中、ライトアップされた登山電車が悲鳴を上げスイッチバックをしながら登って行く、時折、歓声が上がリ闇の中紫

陽花が浮かび上がる。学生が駅まで迎えに来てくれました。近くはない道を車は走り、先生が設計された別荘に到着。既に建物から庭に張り出したテラスではバーベキューパーティーが始まっており、絶好調の先生が学生とバトルを開始されました。

ほのかな灯りにテーブルに並べられた食材と料理に圧倒されてビールにワインを掲げる。楽しい時間でした。

また、天満天神繁昌亭では落語家の人たちとゼミ学生と一緒に植栽まで行い、先生の行動力には驚かされます。

学部学生の卒業制作の現地調査では、長野県まで出かけられ、二泊して山登りを行いました。朝早くから雨飾山に登り始めたが、頂上に立ったときにはかなりの時間が経過し、遅い昼食を済ませ、下山の時間を考えるとわずかな時間しか残されていませんでしたが、その時もスケッチブックを取り出されていました。

大学院修士制作現地調査の岡山倉敷では、歩きながらスケッチされていました。



写真-11 雨飾山でスケッチされる先生

片時もスケッチブックをはなされません。

いつも文章、スケッチは5分あれば書け、描ける。先生は一瞬の閃きを大切にされ、いいかげんな内容、態度に対しては絶対に許されませんでした。

先生との仕事は、先生よりも先を読んで、こちらが主体的にならなければ進まない。このような経験は、私の恩師中根金作先生と同じです。



写真-12 実習で参考となる図面を描かれる狩野先生

先生の仕事に対する真摯な態度、熱い想いが伝わってきます。

どんな出来事も分厚い黒い手帳に学生のこと、気がついたこと、新聞記事、本のタイトルから、内容まで様々なことが書留められ、先生の興味は丸い家から骨、石にまで及びます。

先生の事務所は、様々な仲間が集まり、梁山泊のようであり、先生の事務所で、仕事をした卒業生は幸せです。先生の考え方、仕事に対する態度、スケッチ、収集されたイメージのための石や骨の標本類等に囲まれ、先生の生き様を目の前にみることが出来たのです。



写真-13 狩野事務所にて

先生はお話されることが、よく変わられます。先週と今週では内容が全く正反対のことがあります。それは一週間の間に考えられ、こちらが最適であると考えられたら意見を変えられる柔軟性をもたれているということです。

学生は、しばし、その変わり方に驚きますが、変わらない方が不思議です。

もの作りは、常にそこには留まらない、自由であることです。



写真-14 合評で指導される狩野先生

6. 土曜会の方々と狩野先生

1) 大羽 幹夫 元中外日報社記者

縁は奇異なもので、狩野先生は大塚融さん(元NHK記者)の紹介です。京都の鍔金具商・磯村才治郎商店の磯村浩之亮社長が1992年に第17回吉田五十八賞特別賞を受賞した時の祝賀会で、大塚さんが司会をし、中外日報社で報道しました。その頃から大塚さんとの縁が深まりますが、狩野先生と出合うのは4年ほど前の土曜会の席でした。退職する前に中外日報社の紙面に、狩野野先生と大塚さんの対談を通して、先生の業績を紹介できて誇りにおもっています。

4年ほど前、元NHK記者の大塚融さんに誘われて、大阪・中之島公開堂の土曜会に初めて出席し、主宰者で建築家の狩野忠正先生を紹介していただいた。毎回、その道の専門家を招いての講演内容が分かり易く、講演後の質疑応答も自

由な雰囲気で行われていたことに感心し、時々出席するようになった。私は長年勤めていた京都の宗教専門紙・中外日報社を昨年11月に定年退職しましたが、最後の仕事として、狩野野先生と大塚さんの対談を企画し、狩野先生の業績を読者に紹介できて幸いでした。

2) 澤田 悠紀夫「土曜会・マイスター・造形教室」

ひとことでいえば、「アナログ人間」でしょう。デジタルを排するのではなく、伝統的な技術を大切に、手仕事への良い意味での「こだわり」を持ち続けられていますね。主宰している「土曜会」に集うメンバーからもうかがえますし、土曜会では、そのような技術を持っている人を、「マイスター」として顕彰されています。

また、未来を託す子ども達を育てるということで、「造形教室」を各地で開かれています。ここでも指導してきた有望な人たちが積極的にお手伝いしていますが、これも、人材育成の成果の表われでしょう。

3) 仲野喜一郎 瓦施工業

「あこがれの狩野先生」狩野先生との初めての出会いは、1975年前後だったと覚えています。

当時は(株)竹中工務店の設計部長で設計部の方が700人前後いらっしゃいましてその一番偉い人でした。

屋根瓦のことで阿波座インテスビルの最上階に呼ばれまして、大変怖い人と思いながら行きましたらイタリアのアルマーニーの服を着た大変お洒落な狩野先生が現れました。

平家のゆかり地、四国香川県三木町に円形屋根の建築設計をされている図面を見せていただきました、この屋根にどうしても瓦葺きにしたいと云う相談でした。

私の経験でも、日本で多分初めてと思われる円形屋根の瓦葺きに挑戦することに決めました。職人さんと一緒に図面上に瓦葺きの線を書き本瓦11高枚の施工に挑戦いたしました。

約6ヶ月の施工期間を得て完成し、施主様にも大変喜ばれる自慢の瓦葺きが出来ました。数年後、安藤忠雄さんが見にこられて、施主様に許可を得られて淡路島の花博に同じ建物

を建てられました。

それから、宝塚大劇場阪急宝塚駅・グランコリーナ西阪南（神戸市西区）50m以上もある建物・屋根勾配が1.2寸の瓦葺きを設計していただきました。

その度に相違と工夫により施工方法を考えて来ました、今はパソコンのインターネットで色んな施工方法が分かりますが、施工する方々と一緒に意見交換をして考えて行きたいと思っています。

狩野先生に色々考えて人生を歩めと教えてもらっていますあこがれの狩野先生、いつまでも元気で色んな人たちとの交流をお願い致します。

4) 岩田 章吾 建築家 武庫川女子大学教授

何を言い出すか分からない人。私の狩野先生の印象はそのようなものである。お会いすると、いつも思いもよらないことを当たり前のようにお話になる。言われたほうは、驚き、その意図や意味を思い計ろうとするのだが、もうその段階で先生の術中にはまっているのである。また、先生の言葉は、遅効性の薬（あるいは毒薬？）のようでもある。数年後に「ああ!あの時先生がおっしゃっていたことはこういうことだったのか!」と突如気がつくことも少なくない。恐ろしい人である。

5) 小池 祐一郎 設計事務所勤務

よく話が脱線する人だなあというのが、先生の第一印象でした。建築の話をしていても映画や絵画や彫刻や小説や劇や今朝見た花の話へと話題がいつしか変わっていくからですが、一方で僕は学生として教わるなかで、「根元から飛べ」ということを先生が常におっしゃっていたのをよく覚えています。より広い視野を持ち、常に根本的＝ラディカルであれ。それが狩野先生から教わった、いちばん大切なことだったと思っています。

6) 樋口 真規 土曜会事務局

先生と出会って間もない頃、私が見学した建築の様子をお話すると、先生は「君はその場所で何を感じたのだ」と一言返

された。私はこの質問に答えることが出来なかった。この出来事を強烈に覚えている。「感じる」というキーワードを先生は大切にしておられる。シンプルであるが、挑み甲斐のある命題を背負わせていただいたと感謝するのである。先生の日常には実測やスケッチ、読書といった取り込む作業、そしてそれを絵画や粘土模型、彫刻として吐き出す作業がある。先生は今も尚、日々挑み続けているように感じる。

7) 上 由美子 土曜会

10年前、個性豊かなNHKOBの大塚様に「いい先生がいるから」とご紹介されたのが狩野先生でした。初めは静かな先生という印象を受けましたが、個性豊かな先生でいらっしやると次第に分かってまいりました。先生の驚異的なポジティブ志向と卓越された洞察力を横で拝見する度、「先生は本物の建築家」と周りの方がおっしゃることが理解できます。本当に素晴らしい先生だと心から思います。

8) 大塚 融 建築評論家 経営史研究者

建築の「思想者」・狩野忠正を代表する作品は、今はない川西市清和台のスーパー阪急オアシスである。建築における「時間」の観念を具象化したこと、よく考え抜いた「精神性」を住民に提示したことで、建築の革命家と呼ぶにふさわしい。この後の作品・三輪そうめん山本本社の神の山・三輪山との対峙、生野町の播磨屋本店の入口へのアプローチの時間観念、天満繁昌亭の持つ浪速の歴史感覚は、日本人とはなにものであるかを私に考えさせる。

9) 徳岡 聡一 株式会社徳岡工務店

狩野先生とは、竹中工務店に在籍中、私の父である徳岡昌克と同僚であった時代があり、そのご縁で、私も30年以上のご親交を戴いている。事務所にお伺いすると、資料室であり研究所であるように、多くの書籍に囲まれて執務をされている。その読書量はお手本とすべきものである。建築関係書は言うに及ばず多分野に及んでいる。そこに、建築を学んでいる者にとって、真摯に絶え間なく勉強していく姿勢を気付かせる。

その延長として、子供達にも、建築の楽しさを学ばせる伝道者の役割を担われている。そこで最も大切にされているのは、獨創性であり、自主性である。その指導法は、建築を学ぶものにとって、最も大切なことではないだろうか。

また、私の祖父の葬儀には、お棺を担いでいただいた、優しさと義理を旨とする方である。祖父、父、そして私と3代に亘るご縁を通して、学ばせていただいた沢山のことを、次の世代に伝えることが、私の役目だと考えている今日である。

おわりに

長い人生の中では大きな影響を受ける人との出会いがあります。

狩野先生は建築の世界から様々な分野に発信をされ、大阪芸術大学を退職後は、NPO 法人これからのまち・建築・みどりをつくる会、土曜会、子供達のための建築教室、造形教室を主催、開催され、今現在もその活動力は衰えていません。

土曜会の方々からお聞きしたお話は先生の生き方に共感され、共に高めあう心を強く感じることができます。私にとって中根金作先生との出会いも、一枚の図面をもとに無から物を作り上げ、その素材である石であり、植物を見付け出し組み合わせ、命を吹きこむことにより完成された庭を通して、見た人にいやし、感動を与えられる人間の心にひびく仕事のすばらしさを教えていただきました。

これからもお元気で活躍される事を心から願っています。

先生のお話をさせていただいた土曜会の皆様には心からお礼申し上げます。

狩野忠正先生 主要業績

● 研究分野

建築計画、空間設計、都市計画

● 略歴

- 1962年 神戸大学工学部建築学科卒業
- 1989年 竹中工務店設計部部長
- 1994年 竹中工務店 プリシバルアーキテクト
- 1995年 狩野忠正研究所ベルリン設立
- 1995年 狩野忠正研究所大阪設立
- 1997年 神戸大学工学部建築学科教授
- 2001年 神戸大学名誉博士
- 2001年 大阪芸術大学環境デザイン学科学科長
- 2008年～2011年 大阪芸術大学大学院客員教授

● 建築設計歴

清和台センターモール、三輪そうめん山本本社、池田五月山教会、EXPO'90日本画美術館、心齋橋アーケード、YHP神戸事務所、神戸朝日ビル、心齋橋OPA、ハービス大阪、神戸大学百年記念館、南山洞禅院、ケロヨンシアター、天満天神繁昌亭

● 受賞

- 三輪そうめん山本本社 吉田五十八賞 (1981)
- 神戸大学百年記念館 神戸市景観賞
- 天満天神繁昌亭 大阪ふれあい都市景観賞
- 日本建築士連合会賞優秀賞 (1990)
- 商空間デザイン賞優秀賞 (1993)
- 関西照明普及会賞 (1994)

● 著書

- | | |
|---------------|-----------|
| 現代の民家(1989) | 出版社：学芸出版社 |
| 光・形(1989) | 出版社：求龍堂 |
| 建築ノート(1992) | 出版社：新建築社 |
| 建築に潜む自然(1993) | 出版社：六曜社 |
| 自然に潜む日本(1993) | 出版社：六曜社 |